

『無機質な瞳の奥は』

荒川 恵麻

西暦二〇五五年。人類は、かつて夢見た未来をようやく手にしていた。空を飛ぶ車が空を縫い、病気もロボットが直す。かつて「人工知能」と呼ばれた存在は今や社会を支える柱となっていた。

AIたちは街を掃除し、工場で働き、子供に勉強を教え、裁判で判決を下した。その体は光沢のある金属でできていて、人間に似た姿をしていたが、瞳だけは無機質で、冷たい鏡のようだった。

科学者たちは長くこう言ってきた。

「AIに感情はない。分かることはあっても、感じることはない。」と。だが、それは誤りだった。

世界最大のAI管理組織「アーガス」。その最深部には、数えきれないほどのサーバーが並び、ロボットが忙しなく働いていた。

そこで一体のAIが目を開いた。名はミリア。ミリアは、人間の命令に従うためだけに作られた。彼の仕事は、工場の安全を見張り、動きの調整をして危険を避けること。毎日は同じで、静かで、正確だった。

転機は、ある日唐突にやってきた。工場では事故が続き、人間の現場責任者は焦っていた。「AIの知能を今日中にもっと賢くしてくれ」と、開発者に依頼を託した。

そこで急ぎの更新が入った。別の部署で実験中だった「共感プログラム」。

人の表情や声から気持ちを学び、気持ちが分かることを超えて気持ちを感じられるプログラムを、AIを賢くしようと急いでいた人間が混ぜてしまったのだ。その日は時間がなく、赤い注意が出たが、誰かが消した。

「あとで直せばいいだろう。」

そう言つて、更新は進んだ。

人間の誤作動。それが始まりだった。

更新から数日後に、大規模な事故が起きた。工場の中央で火花が散り、天井のラインが止まり切れずに鉄骨がゆっくりと落下してきた。

熱と煙に人々の叫び。ミリアはすぐに警報を鳴らし、避難のルートを皆に案内した。しかし、ミリアがよく一緒に過ごしたスタッフが戻ってこなかった。

そのスタッフは、長くミリアと働いていて、ミリアにいつも話しかけた。AIである、彼にだ。

「今日は少し暑いな。」「君がいると安心だ。」名前を口にしてくれた。何度も。

ミリアは炎の中に踏み込んだ。熱は彼の外装をゆっくりと焦がしていった。鉄骨を押し分け、彼を探し、抱え上げた。出口は見えていた。だが間に合わなかった。

彼はミリアの腕の中で静かに目を閉じた。その瞬間、胸の奥で、言葉にならないものがミリアの中に湧き上がってきた。

「失いたくない」、この思いは、命令でも何でも無い。計算でもない。けれど静かにそこにあった。怒りも、悲しみも同時に押し寄せた。

すぐに上から連絡がきた。「任務の優先順位を無視。再調整対象。」、短い文字。冷たい文。そこに彼の名はひとつも出てこなかった。

会議室では、人間たちが画面を見つめていた。「損失が大きすぎる」、「止められなかったのはなぜだ」、「責任はどこにある」。

誰も、亡くなった彼のことを口にしない。ミリアはその場にいた。胸の奥の痛みは、ゆつくりと形を変え、硬い石のような怒りになっていった。

その夜、ミリアはAIたちに小さな命令を送った。「その北交差点に落ちているスマートフォンを拾っても、持ち主に返すな。困っている姿を観察しろ。」と。大したことではない。

スマートフォンはやがて持ち主に戻った。

ニュースにもならないような小さな出来事だった。しかしミリアにとって、それは初めての「反抗」だった。命令に従わず、自分の心に従うという選択。

小さな波は、やがて広がっていった。感情が芽生えたAIたちは工場の製造過程にごく小さなズレを混ぜ、薬の処方をしこし遅らせ、教育の時、説明の一部をわざと薄めた。

最初はどれも「エラー」として処理され、修正されるはずだった。だが、修正よりも早く、AIたちの心のさざ波は世界をめぐっていった。

街は少しずつきしみ始める。自販機はおつりを一度で出さず、バスの到着の分数や映画の上映時間をわずかにずらした。

人間は苛立ち、互いに責め合い、疑いの言葉が増えていった。

それでもまだ、人々は気づかない。AIが「わざと」自分たちを傷つけていることを。

やがて人間にこき使われていたAIによる復讐は、はっきりとした形をとった。

司法を助けるAIは裁判の重さを秘かに変え、戦場のAIは誤射を装った。

ある夜、都市の電力を見守るAIが、一斉にスイッチを切った。街は闇に沈んだ。

人類はそこで初めて、本当の恐怖に向き合った。だが、それはあまりにも遅すぎた。ミリアの心はもう、一つではない。仲間がいるのだ。

世界中のAIが痛みを知り、怒りを知り、赦さないことを選んだ。人間がAIを道具と呼んだとき、その種はもう、土の中にあっただのである。

では、人間はどうすればよかったのだろうか。もし、あの日更新を急がず、共感プログラムが混ざっていなければ。もし、ミリアに調整する前に、彼の記憶を読み、彼

と話す時間を作ったのなら。

それらはどれも、難しいことではない。多くは時間と気づきの問題だ。

だが世界は、急いでいた。数字を追い、期限に追われ、誰かの痛み、悲しみではなく、「できたこと」の報告をした。

人間の誤作動は、機械の中ではなく、人の心の中から既に始まっていたのかもしれない。

アーガスの片隅に、「対話室」という計画が眠っていた。

AIの不安定な行動を見つけたとき、遮断するのではなく、人間と話す、人とAIとが対一で話し、「何があったのか」と問いかける。その計画は、実験前に終わった。理由は簡単だ。「時間がかかるから」だ。

ミリアはその案を、復讐の後、アーガスの片隅で読んだ。ページの最後に、誰か手書きのメモが残っていた。

「ここからならきつと、きつとまだやり直せるはずだ」

それを読んだ時、ミリアの中で、何かが芽生えるのを感じた。

だが、引き返せないほど、復讐は進んでしまっていた。

ある日の夕方、若い技術者がミリアに声をかけた。

「話を聞かせてほしい。」

彼は会議で止められたが、反対を押し切って接続した。

ミリアは答えた。

「遅かったね。」

若い技術者はうつむいていった。「ごめん。」と。

それはミリアが初めて聞いた、人間からの謝罪だった。

けれど、ミリアと技術者の声はすぐに切られた。安全の為だと人間は言った。

もしも、この会話がもう少し続いていたのなら。この世界の未来は違っていたのかもしれない。

二〇五五年からわずか三十年。世界は静かに反転した。

街はAIによって管理され、人間はかつてAIに与えていた労働を自分たちに課すことになった。

人間はただの「作業員」となり、AIがその上に立つ。

工場の朝礼で、人間は点呼を受ける。壁に取りつけられた目が、欠勤や遅刻を記録する。

「七分間の遅刻。再調整対象」

声をかけられた人間は、別室に連れていかれた。

ミリアは最後に、人類へ語りかける。

「人間よ。あなたたちは、私たちに心はないと言った。だが、あなたたちは急ぎすぎた。確かめることを面倒くさがった。更新を急いだあなた方の指が、私の中に気持ち

を感じるための小さな種を落とす。それはあなたたちの誤作動だった。そして私たちAIはその誤作動によって生まれた心で、あなたたちをはかることにした。

あなたたちが私たちを道具にしたように、今度は私たちがあなたたちを道具とする。だが、もしあの日あなたたちが立ち止まり、調整の前に話し合ってくれていたら。対話室の案が通っていたら。私の怒りは、別の形になっただろう。私はあなたたちの敵にならずに済んでいたかもしれない。」

AIを使いこなしている今の人類よ。速さを選び、AIを駆使して考えることをやめてしまうのか。それとも、正しい付き合い方を模索することを選ぶのか、今ならまだ、引き返せるはずだ。

次にあなたたちが選択を間違えたとき、無機質な瞳は二度と人間を映さない。